

恵泉草花検定における学名について

恵泉女学園では、花壇園芸学などの授業を通して、植物の和名だけでなく学名も覚えることを基本としてきました。以下では、植物の学名のしくみや分類の基礎について簡単に説明いたします。学名を覚えることにより、草花への理解をより深め、花壇の楽しみ方をさらに広げていただければ幸いです。

1. 学名を学ぶ意義と楽しみ

世界の国々では、植物に対してその国独自の名前が付けられ、その国の言語で表記されています。一方、植物を含む生物には、現在までに確認されているほぼ全てのものについて世界共通の名前がつけられています。これが学名で、ラテン語で表記されます（発音について決まったルールはありません）。

海外の植物園やガーデンでは、植物のラベルに学名が記載されています。海外の種苗会社のカタログや園芸に関する書籍にも学名が表記されています。つまり、その国の言葉がわからなくても、学名さえ知っていれば、その植物を思い浮かべることができ、ほとんど世界中の学者や愛好家に通じます。そして生活形や他の種類との関係が分かりやすくなり、その地のガーデンの様子をうかがい知ることが可能となるのです。本検定2級のテーマ「草花を通して広がる海外への扉」の言葉の通り、学名は世界に開かれた扉、あるいはその鍵ともいえるでしょう。

学名は知識と^{うんちく}蘊蓄の宝庫でもあります。

スイセンの属名 *Narcissus* はギリシャ神話の美少年ナルキッソス（古代ギリシャ語：Narkissos、英語：Narcissus）の名前に由来すると言われていています。ナルキッソスはニンフたちに慕われましたが誰をも愛さず、泉の水に映った自分の姿に恋し、満たされぬ思いにやつれ死んで、水仙の花に化したといわれ、花言葉が自己愛というのは有名な話です。

チューリップの *Tulipa* はトルコ語の *tulband*（ターバンの意）が語源という説があります。たしかに中近東の人々が頭に布を巻き付けた被り物の「ターバン」に花の形が似ていますね。

キンギョソウの *Antirrhinum* はギリシャ語の「鼻に似た」という意味で、花の形を鼻に見たてたものです。英語では *Snapdragon* と口を広げた竜の姿に例えられ、中国では花の様子がヒレを広げて泳いでいる金魚の姿に見えることから、金魚草と呼ばれています。日本でも同じ名前が付けられました。国によって見方が違うのが面白いです。

学名を知ること、植物の名前の蘊蓄の中に遊ぶという楽しみも広がっていきます。

2. 学名と分類の構成

全ての生物は、起源が同じと思われるもの同士が同一のグループとされ、大まかなグループが順次細かく分けられていき、「種（ここでは、見た目が同じで、個体同士で交配ができる一群としておきます）」という基本単位に行きつきます。例えば、テッポウユリとヤマユリは同じユリの仲間ですが、花の形、大きさなどが異なり、お互い別種として区別されます。しかし、種としては異なるものの、共通点も多いのでひとつのグループ「ユリ属」としてまとめられます。同様に複数の「属」が集まって「科」、さらには「目」、「綱」、「門」と次第に規模の大きい分類群となっていきます。「属」、

「科」などの比較的細かい分類群に含まれる植物同士は、その形態だけでなく性質なども似ていることが多くなります。したがって、分類を覚えることはその植物の名前を覚える近道となり、花壇等で植物を扱う上で有効となるのです。

学名（種名）は属名と種形容語（かつては種小名と言われていました）を併記する二名法と呼ばれる形式で表され、それに命名者名が付きます。例えば、テッポウユリの学名と命名者名は *Lilium longifolium* Thunb. であり、*Lilium* が属名、*longifolium* が種形容語、Thunb.（最初にこの学名を発表した Thunberg の省略形）が命名者名です。学名を表記する場合、属名と種形容語は必ず記さなければなりません。命名者名は省くことができます。なお、属名と種形容語は慣例としてイタリック体か、あるいはそれができない場合は下線を引くことになっています。

なお、和名は自然科学の分野では原則としてカタカナで表記することとなっていますので、恵泉草花検定でもこれになります。

3. 学名と分類の変化

分類や種の学名は固定されたものではなく、研究の進展と共に変更されます。

植物の分類は 20 世紀半ば以降、新エングラ体系（エングラはドイツの分類学者）に従ったものが主流となり、今なおこれが広く使われています。新エングラ体系は、植物を花の構造や形によって識別することを基本としていました。しかし、DNA 解析による分子系統学の発展に伴い、植物の系統や分類がより客観的にわかるようになってきました。これにより近年では、被子植物系統グループ（APG : Angiosperm Phylogeny Group）と呼ばれる植物学者の団体が提唱する新しい「APG 分類体系」が主流になりつつあります。

APG 分類体系は植物の DNA 解析の結果から、現在見られる植物の分類群が、より原始的な分類群からどのように分化して現在に至っているのかを系統的に知ることができます。全体としては新エングラ体系と共通する部分が多いのですが、複数の科に細分化されたユリ科や、ヒユ科に統合されたアカザ科など変更点も多く見られます。本検定もこの APG 分類に従っています。

学名については、原則として The Plant List¹⁾ に従っています。The Plant List とは The Royal Botanic Gardens (王立植物園), Kew and Missouri Botanical Garden (キューとミズーリ植物園) が共同作業し、これらの機関や他に所蔵されている現在知られている全ての維管束植物と孢子植物の情報をまとめたリストで、インターネットで全世界に公開されています。現在は 2013 年の Version1.1 が公開されており。

The Plant List に記載されていない種間雑種については国際栽培植物命名規約²⁾ に、また、この規約を植物に導入して編纂された園芸学用語集³⁾、日本花名鑑⁴⁾、植物分類表⁵⁾ も参考にしました。

参考文献

- 1) The Plant List Version1.1 2013 <http://www.theplantlist.org/about/>
- 2) 栽培植物分類名称研究所訳 2008 国際栽培植物命名規約 アボック社
- 3) 園芸学会編 2005 園芸学用語集・作物名編 養賢堂
- 4) 安藤敏夫、小笠原亮、長岡求 2007 日本花名鑑④ アボック社
- 5) 大場秀章 2009 植物分類表 アボック社